

に於て一千文とす。

第三節 蘭州肅州間

車上の客
となる

北京出發以來、鄭州迄は汽車に、鄭州、蘭州間は全部騎馬に倚りしも、今や乘馬を棄て、専ら乘車旅行を爲すに至れり。即ち蘭州、烏魯木齊間、滞在日數を込めて約七十日の豫定、使用車三臺、其の價銀四百十四兩（一臺銀百三十八兩宛）にて雇入れぬ。蓋し蘭州以西は進むに従うて渺茫たるの沙地、即ち戈壁帶に屬し、寂々寞々、所謂千里行人絶の境に臨まんとし。其間部落絶へ客舍無く否有るも頗る粗野、殆んど入るに堪へず、寧ろ車上に臥するの優るに如かざるものあり、況んや日常の需用品及食料等を求むべき無きをや。是に於てか起臥之を共にする乗車の便なるに倚らんとするなり。車は彎隆形なる蓆子の屋蓋を具へ更に防寒の爲め毛氈にて外面を被覆し、入口には綿入の帳を垂れ内に羊毛製の厚き蒲團を布き、食料品、炊具等を準備し到る處に宿泊す。自由の如く、風流の如くなるも、尙ほ寒氣凜烈にして數月間斯る蝸牛廬裡に起臥するの苦は、實に豫想外のもの有り。